

海の森

石川 幹子

いしかわ みきこ

東京大学大学院工学系研究科 教授

日本が世界に誇る文化のひとつに庭園がある。飛鳥・奈良の頃、大陸から伝来した庭園技法は、長い年月の中で独特の発達を遂げ今日に至る。超高層建築が林立する東京都心でも、庭園文化は、その足もとにしっかりと息づいている。なかでも、東京湾という海の自然を取り込んだ、大らかな庭園が、「浜離宮恩賜庭園」である。新橋駅の雑踏を抜け、汐留め再開発ビル群を通り、さらに高速道路の高架下を抜けると、汐の香りと共に、巨大な石組みの大手門の遺構が現れる。

この庭園は、いまから350年前、4代将軍家綱が、葦の生い茂った沼沢地を弟の綱重(甲府宰相)に与え、邸地を営むことを許可したことに始まる。綱重の子綱豊は、六代将軍家宣となり、爾来、将軍家の濱御殿として明治に至るまで維持されてきた。庭園の意匠は、海の干満の差を取り入れ、遥かに広がる江戸湊、そして富士の高嶺を臨む壮大なスケールを有するものであり、春夏秋冬の風

情を楽しむ茶屋が配された。歴代将軍の庭園経営は多様であり、なかでも8代将軍吉宗は財政建て直しという観点から、園内に製糖所、製塩所、鍛冶小屋、薬草園を設けたと伝えられている。

図-1は、東京都所有の図面である(昭和48年測量・加筆)汐入の池の大泉水を中心とし、八景山、富士見山、御亭山、樋ノ口山などの起伏に富んだ眺望点が海の庭園としての躍動感を与えていることがわかる。なかでも、ムカデの足のような庚申堂鴨場、新銭座鴨場は、現代アートにもまさる迫力であり「用と景」を兼ね備えた庭園技術の結実である。これらの小丘には、タブの木が植樹され、現在では東京湾岸有数のタブ林となっている。都市の自然も、適切な基盤整備がなされれば、時代と共に本物の自然へと、遷移をとげていくことが可能であることを、この森は物語っている。

庭園と周辺地域の関連を知るうえで重要な図面が、**図-2**であ

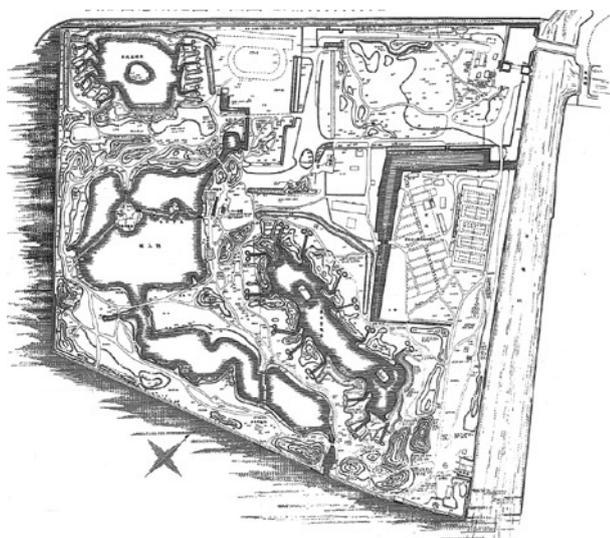


図-1 浜離宮恩賜庭園図面：引用『日本庭園図説』



図-2 明治期の浜離宮周辺：引用(財)日本地図センター発行「参謀本部陸軍部測量局、5千分の一東京図測量原図」

る。これは明治16年、フランス式淡彩図法によりつくられた浜離宮周辺の地形図である。隣接地では、文明開化の象徴である、新橋・横浜を結ぶ鉄道の起点である新橋停車場の建設が行われているが、海に向かって開かれた庭園本来の意匠は連綿として継承されていることがわかる。

しかしながら、近代化の歩みは、浜離宮にとって受難の連続であった。魚市場への売却(大正年間)、関東大震災での罹災、東京大空襲によるほぼ全焼失、戦後の米軍演習場としての利用と風紀の乱れ、築地川・汐留川の埋め立て計画(昭和30年)など、庭園文化は、忘却の彼方へと葬り去られた時代が長く続いた。しかしながら、庭園文化を守ろうという少数の心ある人びとの熱意により、この庭園が21世紀に継承されてきたことは、ほとんど奇跡とも思える。

翻って、写真-1は、現在の浜離宮庭園である。海景を手中に収めたいという人間の思いは、古来より変ることがないのであろうか、高層

ビル群が庭園の周りを寸分の余地もなく取り囲み、景観、そして海風を独占する結果となっている。これが、最も豊かな時代であるはずの今日の東京の現実である。

これらの再開発事業は、ビル群の足もとに、ささやかな公開空地を設けることにより容積率と高さにボーナスを付与し、高層建築の建設を可能とした一連の規制緩和政策により生み出されたものである。市場経済原理主義による近視眼的都市政策が、江戸期より350年にわたり営々として継承されてきた、「社会的共通資本」としての庭園文化を、きわめて短期間で、あっという間に破壊してしまった現実を私たちは、同世代に生きるものとして、厳しく受け止めなければならない。

人間の暮らしにとって、社会の共有財産として維持継承していかなければならないものを「社会的共通資本」と呼ぶ。道路・鉄道などのハードな構造物だけではなく、砂防林、公園、庭園などの緑地、また、教

育などの社会的システムもこれに相当する。「社会的共通資本」は、多くの人びとの合意を踏まえて、何世代にもわたり、営々として築きあげられ、継承されてきたものである。わかりやすい事例として、本稿で示したのが、この浜離宮庭園である。

20世紀後半における日本の都市政策の特色は、長い年月をかけて先人が築き上げてきた「社会的共通資本」を、無料のものとして、切り崩してきたことにある。今日、頻繁に唱えられている「持続的維持(サステナビリティ)」とは、現在ある姿を将来の世代へと手渡して行こうとする考え方である。

しかし、これでは、十分とはいえない。今日、必要とされていることは、一歩進んで20世紀が破壊した社会的共通資本を復興させ、さらに次世代への資産を創り出していくことにある。

それは、困難なことなのだろうか？ 私は、「時間の価値」を目に見える形で翻訳をし、社会にメッセージとして発信していくことにより、可能であると考える。

江戸時代からの過度の利用により荒廃し、土石流の頻発していた六甲山は、六甲砂防の半世紀に渡る努力により、豊かな森となった。浜離宮は、タブの常緑広葉樹林となり、汐入の池ではボラが銀鱗を煌かせて泳いでいる。時間の価値を「森」という形で翻訳し、社会に発信していくことにより、「社会的共通資本」の意味を、誰もが理解できるものにするのが可能である。

おそらく、ここに、私たちの職能の真の役割があるのではないだろうか。



写真-1 浜離宮恩賜庭園